

< 特別寄稿 >

正山征洋先生のご厚意で所蔵されている「ボタニカルアート」の一部を紹介していただく事になりました。大変貴重で興味深く、芸術性も高い作品に加え先生自ら解説されています。

ボタニカルアート

九州大学名誉教授・長崎国際大学名誉教授

正山征洋先生



第8回

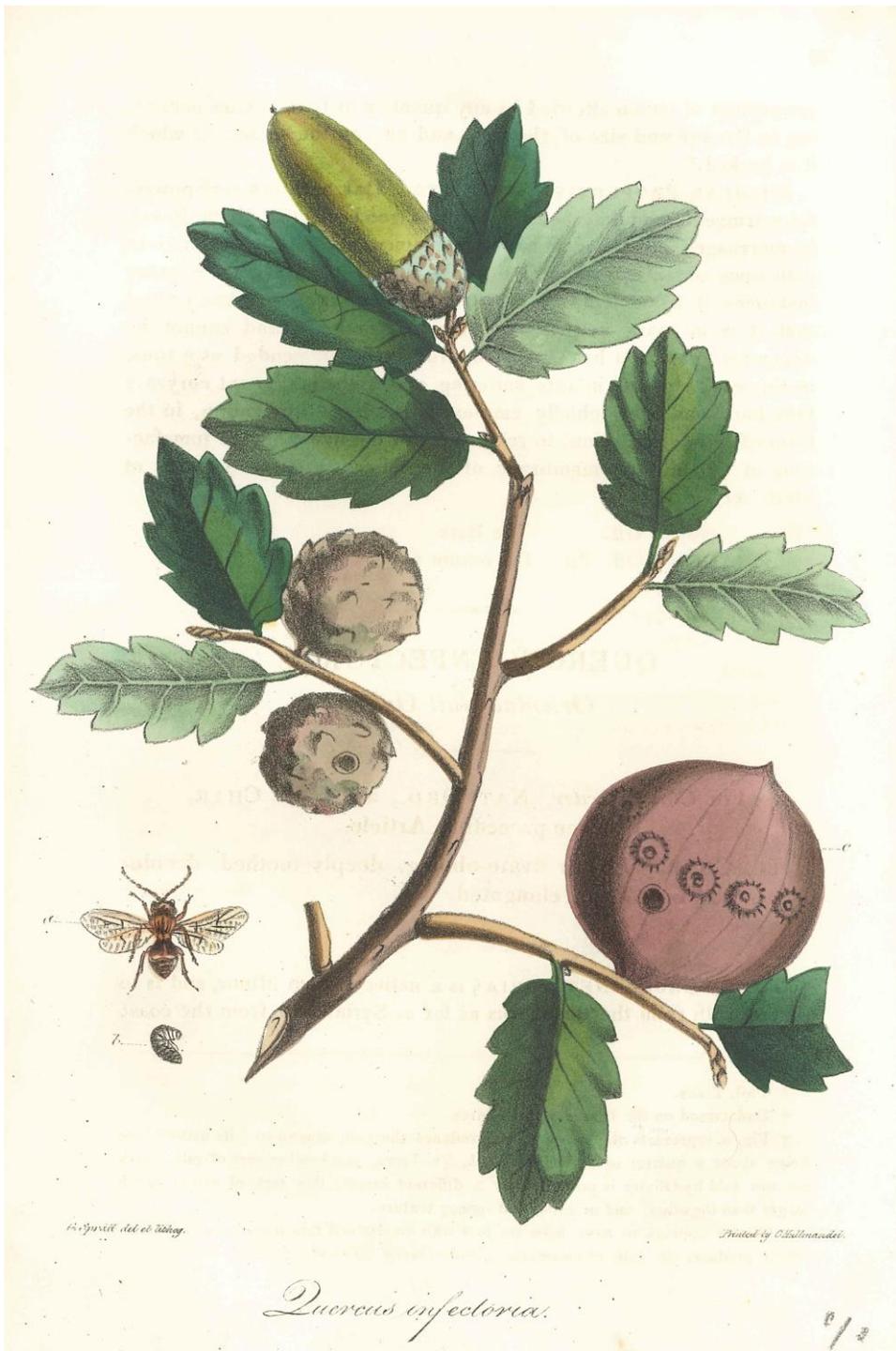
没食子（もっしょくし）

地中海沿岸を中心に自生する、カシ、コナラ、アベマキ等に似た高木の葉の新芽に左下のインクフシバチ（没食子蜂；画の左下）が寄生して

産卵し、虫こぶを作ったものが没食子と呼ばれるものでタンニン原料となります。画の中でボール状の虫癭（ちゅうえい）がそれです。

没食子にはタンニンが50～70%も含まれています。没食子のタンニンはグルコースの水酸基に没食子酸が結合したもので、アルブミンと結合させたタンニン酸アルブミンや生薬のオウバク（黄檗）から単離したベルベリンと結合したタンニン酸ベルベリン等の製剤がつくられています。何れも下痢止めとして服用します。特にタンニン酸ベルベリンは腸内でタンニンとベルベリンが遊離して、ベルベリンにより腸内細菌による異常発酵を治す作用を持っています。また、インクの原料や染色としても用いられます。

本画の作者や製作年代は不詳ですが学名は*Quercus infectoria*と読み取れます。ラテン語の*Quercus*は良質の木、*infectoria*は染色の意味で、染色に用いられていたことが窺えます。英語の*infection*（感染）とも関係があるのかも知れません。



Quercus infectoria.